

この時期にしては少し暑い陽射しが瞳を眩ますようで、レオアリスは太陽に向かって手をかざした。

「いい天気だな——」

冬の冷気が漂いながらも、昨夜の雨雲は薄い帯を残すだけ、晴れ渡って気持ちのいい日だった。午前中の各中隊の訓練を一回りして、レオアリスは予定より少し早く第一大隊の士官棟に戻ってきたところだ。

昼にはまだ間があり、午後の仕事は諸々の書類の決裁が主になる。時間に融通が利く上、今日グランスレイは公休でない。

レオアリスは再び空を見上げた。青い。冬の空とは思えないほど青く澄んでいる。

「——」

ハヤテ——彼の銀翼の飛竜とこっそり散歩に行こうかと、そんな考えがむくむくと頭をもたげた時だった。

「上将！」

不意に声をかけられ、レオアリスは不埒な考えを見抜かれたかのように首を縮めた。

「うわっ、すいません、思っただけで」

慌てて声のした方を見れば、士官棟の入り口から隊士のウィンレットが走り寄って来る。ウィンレットは事務官として配属されていて、士官棟の管理を担当している。

「びっくりした……グランスレイかと思ったぜ……」

「何か？」

ウィンレットは敬礼し、胸を押さえている上官の様子に髷を蓄えた厳めしい顔を傾げた。

「何でもない。それよりどうかしたのか？」

レオアリスは士官棟の入り口前の階段を上がりながら、後ろから付き従うウィンレットを斜めに振り返った。いつも寡黙なこの男が、珍しく困った顔をしている。入り口を潜ったところで、ウィンレットはびたりと足を止めた。

「いや、その、——申し訳ございません！」

「はあ？」

いきなり頭を下げられて、レオアリスは訳も判らず瞳を瞬かせる。

「一体」

「侵入者がありました」

「侵入者——？」

穏やかではない言葉に、今までのんびりしていたレオアリスの表情が鋭く引き締まる。漆黒の瞳に浮かんできた色は、先ほどまで執務を抜け出そうと考えていた時のものとは全く違った。

王の剣士と呼ばれる最高位の剣士、近衛師団大将としての姿だ。

「どこだ」

ウィンレットはその姿を誇らしさを持って眺め、それから戸惑ったように首を振った。

「いえ、実は侵入したのは子供でして……」

思ってもみない言葉に、肩から纏った長布を外しかけていた手を止め、

レオアリスは瞳を見開いた。

「……子供お？ 子供って、侵入者が？」

「はあ、ちゃんまいのが一人、どこから潜り込んだようで」

「迷子の間違いじゃねえのか？ 誰かの子供とか」

「いえ、どうも違うようです。警備の目に止まらない内に入り込んだらしく、二階の書庫の前にはいたので取り敢えず保護……いえ、確保しましたが、どうしましょう」

ウィンレットは困った顔でレオアリスを見つめている。

「うちの警備はガキに抜かれんのか……」

溜息と一緒に黒髪をくしゃくしゃと混ぜる。

さほど嚴重ではないものの、士官棟には常時衛兵が立っている。棟内に入り込むまで全く誰も気付かなかったというのは、さすがに問題だ。

「すみません、油断してたつもりではないんですが」

「入り込んだのはその一人だけか？」

「くまなく捜しましたが、他は見当たりません」

ウィンレットはきつぱり首を振り、レオアリスは考えながら革靴の先でとんとんと床を叩いた。

「一人か。——まあなら、もう捕まえたんだからいいか。グランズレイが不在で良かったな！ で、どうしたんだ、それ」

すぐにあっけらかんと笑って恐縮仕切りのウィンレットの肩を叩き、扉の奥にある階段を眺めた。

「上將にお会いしたいと言って聞かないので、二階に待たせてあります」  
意外そうに、レオアリスが振り返る。

「俺に？ 俺に用があつて二階か——」

棟に入って左右に硝子張りの扉があり、正面の扉の無い出入口はレオアリス達の執務室のある中庭へ続いている。二階へは左右の硝子戸の奥の階段を昇る。

侵入者は、事前に第一大隊の士官棟を下調べして来なかったようだ。

「何の用だつて？」

「それが要領を得なくて」

「ふうん。まあいいや、会ってみよう。執務室に連れてきてくれ」

「接見室でなくても？」

「あそこは窓もないしな。相手は子供だろ、いいよ、俺の執務室で」

接見室は元々、捕縛した相手を尋問する為の部屋だ。狭くて圧迫感がある。心理的効果を得る為に、敢えてそうして造られているのだ。

侵入者への対応としては間違つてはいないが、子供には酷な環境で、ウイ

ンレットも同じように考えていたのだろう、レオアリスの許可が下りた事にほっと顔を綻ばせた。

「判りました、お連れします」

また敬礼し、それから左側の扉を開けて駆けていくウィンレットの背中を見送り、レオアリスはウィンレットとは別の方、執務室への角を曲がった。すぐそこが中庭になっていて、執務室は中庭を巡る回廊の奥にある。

陽の降り注ぐ中庭に一步踏み込んだ瞬間、冷えた声がかかった。

「責任者自ら、規則を次々無視されては困る」

「うおっ！ い、いたのか、ロットバルト」

角の壁に寄りかかり、ロットバルトは水を思わせる整った顔に、遠慮の無い呆れた色を浮かべている。

「あー、びっくりした……ま、まあいいじゃねえか、子供なんだし」

今の会話はばつちり聞かれていたのだろう、レオアリスはちよつと早口になって言い訳をした。

ロットバルトが息を吐き、壁から身を起こす。

「客観的に見ればそうですが、貴方にはまず隊の大將としての判断があるでしょう」

「隊の……まあ」

「第一に、侵入された事をなおざりにしない。第二に状況改善の責務を怠らない。第三に捕縛者に対しては規則に則つて接見室で接見する、それから」

これまでで一番呆れた色が着い瞳に込められる。

「大將が身元確認も済まない内にはいはい考えもなく侵入者に会おうなど  
としない」

えらい言われようだ。が、一理も二理もあるし口では勝てないので、レオアリスは素直に頭を下げた。

「——すみません」

と言いつつ、すぐひよいと顔を上げる。

「まあでも、興味ねえか？ 師団の士官棟に侵入する子供ってさ」

面白そうに輝いた瞳を、ロットバルトはすげない視線で迎えた。

「警備の盲点の洗い直しが先でしょう」

「そう堅い事言うなって。せっかくなんだから勇敢な侵入者の顔でも拝もうぜ」

中庭の回廊を執務室へと歩きながら、どことなくうきうきした口調でレオアリスは笑った。

回廊の左手には気持ちのいい中庭が広がり、中央の噴水がさらさらと音を立てている。中庭への入り口とちょうど対角の位置に、レオアリス達の執務室があった。

第一大隊の執務室が他と少し違うのは、通常、大将の執務室といえは棟の最上階と相場が決まっているが、ここでは一階にあるという事と、各中将の部屋もこの一室に纏められている事だ。

その方が仕事の手取り早い、とレオアリスの意見でこうした配置になったのだが、確かに意志疎通が楽で仕事の効率は上がった。

二人が戻った時には広い執務室にはまだ誰の姿も無く、がらんとしていた。

中将、副将、そしてレオアリスを含めて六名の机が並べられているが、今日はグランスレイは公休で、フレイザー、ヴィルトール、クライフの三名の左中右軍の中将達は、現在演習場で指揮を取っている。

レオアリスは一番奥の、広い窓の前に置かれた自分の机を眺め、その上に山積みされた書類の束に、密かな溜息を洩らした。

(朝より増えている……)

増やした張本人は何の感慨も見せずその山に近付くと、上に乗せられていた数冊の綴りを取り上げた。

「幾つかは今日の夕方までに総司令部に提出します。まずはこれらをご確認いただき、決裁を。それ以外は余裕がありますね」

「余裕って」

「明日の昼までで結構です」

(——「までで」?)

ロットバルトの机の上にも、まだ作りかけの書類が載っている。窓から見える青い空と机の上の書類の山を見比べ、楽しいハヤテとの空中散歩を敢え無く断念した時、扉が叩かれた。

「失礼します！ 侵入者を連れてまいりました」

ガチャリと扉が開き、窓の外を見上げていた視線を戻して——レオアリスは絶句した。普段表情を変えざる事のないロットバルトでさえ、書類を取り上げた手を止めて、啞然とした様子でウィンレットの足元にいる姿を眺めている。

連れてこられたのは、まだ三歳か、良くて四歳位の——女の子だ。

てつきり男だと、しかも子供と言ってもせめて十代だろうと思っていたレオアリスは眼をしばたかせた。

見間違えでも何でも無い、真正正銘の女の子。くるくるとした亜麻色の巻き毛を頭の脇で二つに結って、とても可愛らしい。

「え、それ……？ 子供って言うか、まだ幼児じゃねえか」

「はあ、そうなんです」

「いや——」

そうなんですと言われても非常に困る。

一方で、少女はすっかり怯えた様子で、丸い大きな瞳を見開き、レオアリスとロットバルトとウィンレットとを恐る恐る見比べている。

「侵入者と評する事自体が間違いですね」

ロットバルトは肩を竦め、それからフレイザーの執務机を見た。

「フレイザー中将の戻りは」

「只今、南第二演習場で演習中で……おそらく昼過ぎかと」

「では、他の」

「あ！」

レオアリスが小さく声を上げる。少女がとっとロットバルトに近寄っ

てきゅつと軍服の裾を掴み、ウインレットをそおつと振り返った。

「このおじちゃんこわい」

ひくり、とウインレットの顔がひきつる。レオアリスは吹き出すのを堪えてぱつと口元を押さえた。確かに隊士の顔は揉み上げから口の周りまでたつぷり髭を蓄えていて、強面だ。

「おじちゃ……わ、私はまだ二十三で」

「まあまあウイン、子供の言う事だ」

「おねえさんがおはなしきいててくれるの？」

「お姉さん……？」

フレイザーは今いないけど……と少女の視線を追って、今度は堪らずレオアリスは吹き出した。少女の視線はじつと、ロットバルトに向けられている。

「上将」

ロットバルトの冷えた声も、さすがに余り甲斐はない。ひとしきり笑い転げてから、レオアリスはひらひらと手を振った。

「わ——、判った判った、そのおねーさんと俺が話を聞くから。いいぜウイン、戻って」

少しうなだれた様子でウインレットが執務室を退出すると、残ったのはレオアリスとロットバルトだけになり、少女は漸くほつとしたようだった。「とりあえず、そこに座るか」

部屋の真ん中に置かれている長椅子に座らせてその傍に膝を付き、俯いていた顔を覗き込む。少女の手はまだしつかりとロットバルトの軍服を握っていて、ロットバルトは解くのを諦めたのか、その脇に立った。

「名前は？」

「ターニャ。みつつ」

といいながら、小さい指を四本立てている。

(……どっちかなー)

多分三歳だろう。小指を曲げるのがまだ上手くできないのだ。

「ターニャは何でここに来たんだ？　ここは近衛師団なんだが……何か用があるのか？」

こつくり頷いて、ターニャは何かを探すようにきよろきよろと部屋の中を見回した。

「けんしさんに会いに来たの。けんしさんは？」

ただだしく「けんし」と言われて束の間考え、それからレオアリスはターニャに視線を戻した。

「俺だけだ」

ターニャは驚いて顔を上げ、大きな瞳でまじまじとレオアリスを見つめた。

「……おにいちゃんがけんしさん？」

ちよつと疑わしうに首をかしげ、それからロットバルトを見上げる。

ロットバルトが微笑んで頷くと、漸く納得したのか瞳を輝かせた。

「よかった——けんしさんにおねがいがあるの」

「何で一発で信用されないかな……」

ぶつぶつ文句を言っているが、先ほどウインレットとロットバルトへの評価を大笑いしたレオアリスにその資格は無い。ターニャは椅子を降りてレオアリスの前に立ち、小さな頭を精一杯下げた。

「おねがいます、ミーニャをたすけてください！」

思いがけない言葉に、二人が顔を見合わせる。ターニャの声は幼いながら、必死な響きがあった。

「ミーニャ？」

「あのね、いもうとなの。きのうあそびに行つて、それからかえつてこないの」

「昨日？　昨日って——」

昨日から帰つてこないというのはただ事ではない。レオアリスは膝を寄せて、しつかりとターニャの顔を覗き込んだ。

「父さんか母さんは？　捜しに行ったのか」

「お父さんもお母さんもおしごとでないの。ターニヤはミーニヤをさがしに行きたいけど——こわくて行けないよう」

思い出して悲しくなってきたのだろう、すっかり涙声になってターニヤはすすり上げた。

「みんなにたのんだのに、セルテおばちゃんはきいてくれないし、エルも大きなお兄ちゃんたちもこわがってさがしに行ってくれないの——」

レオアリスはターニヤの背中をぽんぽんと叩き、努めて優しくゆっくりと問いかけた。これ以上泣き出す前に、状況を聞きださないといけない。

「落ち着けよ、な？ ミーニヤは何処に行つたんだ？ 恐いって？」

「ん？」

おばけやしき。おばけ↓お化け。やしき↓屋敷。お化け屋敷。

変換するのに少し時間がかかった。

「——はあ？」

ターニヤの話はたどたどしく、しかも半分泣きながら話す為に筋道立った説明は到底できなかったが、掻い摘むとこんな感じだ。

ターニヤの家は商売を営んでいて、両親は仕入れの為に昨日の朝から隣街に行っている。帰ってくるのは明後日だ。

家族は他には五つ年上の兄のエルと二つになる妹のミーニヤ。両親の居ない間は、近所の総菜屋のセルテおばさんが兄妹を預かってくれている。

昨日の夕暮れ、ミーニヤと一緒に遊びに出かけたところ、ミーニヤはある家に入り込んだまま、出てこなくなってしまった。

そこは街外れの廃屋で、子供達からはお化け屋敷だと恐がられている場所だ。

ターニヤはミーニヤを捜したかったが、辺りはすっかり暗くなりどうしようも恐くて入れなかった。

周りの大人達はその内戻ると言って取り合ってくれず、エルや年上の男の子達も恐がって誰もミーニヤを捜しに行ってくれない。

「だから、けんしさんにおねがいしてきたの。けんしさんはいちばんつよいんでしょ？ エルが言ってたもん。けんしさん、ミーニヤをたすけてくれる？」

幼い少女の涙ぐましい訴えに、レオアリスは是も否もなく頷きかけた。

「そのくらい」

「上將」

咎める響きに、レオアリスは立ち上がってロットバルトを睨む。

「お前なあ、こんなちびを追い返すってのか」

「任せるべき相手は他にいますよ」

さすがに言い合う声は、ターニヤを氣遣って抑えられている。

「何言つてんだ、せつかくこんな所まで来たのに。こんなちびの足でどれだけかかると思つてんだ。きつと夜中必死で考えて、朝一で出てきたんだぜ」

「問題はそこですか？ おかしいでしょう。二歳児がいなくなつて周囲の大人達が全く取り合わないなど、普通では有り得ない」

「だからここまで来たんだろ。第一お化け屋敷だぜ、お化け屋敷。見た：いや、ほつといたら危ないだろうが」

ひそひそと小声で言い合っている二人を見比べている内に、不安になったターニヤはくしゃりと顔を歪め、とうとう大声で泣き出してしまった。

「うああああん！ ミーニヤがおばけに食べられちゃうーっ！」

「ほらあつ、どーすんだ、限界切ったぞ」

レオアリスは慌ててターニヤの傍にしゃがみ込んだが、どうしていいかわらずにロットバルトを睨んだ。

「けんしさんもおばけがこわいんだあー！」

「つて俺かよ。あー……、恐くない、全つ然恐くないし、妹は助けてやるから泣くなよ、な」

だが一旦堰を切った三歳児はそうそう泣き止むはずもなく、わんわんと執務室内に響く泣き声の中で、レオアリスは困り果てて頭を抱えた。

「――全く」

ロットバルトは溜息をつき、ターニヤの前に膝をついた。頭をそっと撫でて顔を向かせる。

「安心しなさい」

穏やかな声に、ターニヤはひくりとしゃくりあげ、それでもじっとロットバルトを見上げた。

「彼は嘘は言わない、必ずミーニヤを助けてくれますよ」

「ほんとう？」

「もちろん」

大きな瞳が二人を交互に見つめ、嘘が無い事を悟ったのか、喜びで頬が薔薇色に染まる。

「おねえさん、ありがとう」

レオアリスは再び爆笑し、長椅子に突っ伏した。ロットバルトは上官に視線を投げたものの、諦めた様子で立ち上がる。

「まあ夕方までにはお戻りください。余り騒ぎを大きくしないように」

「何言ってるんだ、お前も行くんだぜ」

笑いすぎて半分涙目になりながら身を起こし、レオアリスは手の甲で目を拭いた。

「――何故」

「子守り」

にやり、と嬉しそうに笑う。普段からかう事のできない相手をからかえるのは、かなり楽しいものだ。

「いやー、だって俺一人でまた泣かれても困るしさ。お前がそんな特技を持つてるとは知らなかった、意外だぜ」

ロットバルトが反論する前に、ターニヤの顔を覗き込む。

「ターニヤもねーちゃんがいた方がいいよな？」

「うん！」

ターニヤは何の疑いもなく、にこにこ顔全体で笑い、両手を差し伸べた。

「だっこ」

「――」

氷のような、と評される視線も、三歳児には通用しない。

「持つてつてやれよ。その方が早い」

黙り込んだロットバルトへ笑みを向け、溜息をつきながらも彼がターニヤを抱え上げたのを見届けてから、レオアリスは立ち上がった。

ターニヤの家は商家の立ち並ぶ王都第二層の外れ辺りにあった。表通りには野菜や肉類、生活用品など手ごろな価格の商店が軒を連ねている。すぐ傍を細い用水路が流れ、込みあつていながらどこか落ち着いた佇まいの区域だ。

真つ昼間に軍服を着た男が二人、幼児を抱えて買い物客の間を歩くのは、想像以上に浮いた。

「ちよつと間違うと誘拐犯だと思われそうだよな」

すれ違う買い物客達の視線が、物問いたげな様子で三人の上に注がれていく。突然振り向いても多分、目が合うに違いない。

「師団の軍服を着ていなければ確実に疑われるでしょうね」

「やっぱりお前がいて良かった。俺一人で手を引いたら通報される」

「まさか。単に遊んでいると思われただけですよ」

「――」

その言葉の含みに顔をしかめた時、ふいに大きな声がかかった。

「タニアちゃん?!」

通り添いの店から店仕舞いの準備をしていた四十絡みの女が、驚いた顔で走り寄ってくる。

恰幅のいい女は二人を遮るように立ち、少女と二人とを見比べた。

「あんたら軍人さんかい？ タニアちゃん何かあったの？」

「タニア？」

尋ねかけて、それがターニヤの本名なのだと気付く。

「まさか事件にでも巻き込まれたのかい」

女は何か大事でもあったのかと青い顔で詰め寄った。当の本人はロットバルトに抱えられたまま、すっかり気持ちよさそうに眠っている。

「いや、この子――」

「遠出をして迷子になったようですね。我々が保護して、家へ送り届ける

所です」

さりげなくレオアリスを制して、ロットバルトが穏やかな口調で説明すると、女はそれで納得して漸く安堵の色を浮かべた。

近衛師団の軍服と二人の外見――特にこの場合ロットバルトの――の陰で、余計な疑いは抱かれなかったようだ。女はうつとりした眼でロットバルトを見つめ、大きく溜めていた息を吐いた。

「ああ良かった。助かったよ。ついさっきエル――この子のお兄ちゃんが慌てて飛び込んできてね、タニアちゃんがいなくて言うもんだから、今店閉めてとにかく探しに行こうと思ってたところなんだ」

「お兄さんは？」

「家の前に居ろつて帰したよ。早く行つてあげてちょうだい」

そう言うと、タニアよりも十倍は正確に少女の家までの道を教えてくれた。

札を言つて女と別れ、しばらく通りを歩いて行くと、教えられた路地の表示はすぐに見つけられた。

表通りから入り込んだ細い路地の左右に扉が並び、こちら側が表通りに店を構える住人達の、普段の通用口のような。

小さな窓の横を抜ける時には、話し声も聞こえてくる。

「ああ、あそこですね」

ロットバルトが示した先に、女が教えてくれた特徴の家があった。狭い路地の奥の、石段を五段ほど上がった小さな家で、緑に覆われた玄関が良く目立つ。

その玄関の前に十歳位の少年の姿がある。

「タニア、あれ兄ちゃんだろ」

声をかけて肩をそつと揺ると、タニアは寝ぼけ眼で顔を上げた。家の前に少年の姿を見つけて、ぱつと顔を輝かせて元気一杯に手を振る。

「エルー、たたいまー」

うろろと狭い玄関の前を行ったり来たりしていた少年はタニアの声を

聞いた途端、まだ幼い顔に不安と怒りと、それから安堵をごちゃ混ぜにした。階段を駆け下り、あつという間にロットバルトの手からタニアを奪い取り、庇うように抱き抱える。

「誰だあんた等！ タニア、お前朝からどこ行ってたんだ、このバカ！」

「ミーニヤをさがすんだもん」

タニアには兄が怒っている理由が判らないのだろう、あどけなくにこにこ笑っている。エルはタニアの言葉にさっと青ざめた。

「ミーニヤって……まさか一人であそこに行ったんじゃ」

「ちがうのー。ターニヤけんしさんをつれてきたの。けんしさんはミーニヤをたすけてくれるのよ」

「——剣士……？」

ぽかんとして、エルは妹と、ロットバルトと、それからレオアリスの顔を見つめた。タニアと同じ鳶色の瞳がみるみる見開かれる。

「……師団の軍服だ——すげえ」

まずは軍服に感嘆の溜息を洩らし、それからロットバルトとレオアリス、二人の胸にある紀章を見比べた。

「銀三本で中将……うわ、横三本に縦一本って、第一大隊大将だっ！ ほ、

ほんとに剣士?!」

「……お前の兄ちゃんはあるか、軍愛好家か何かか？」

紀章を見れば所属や階級が判るようになってきているものの、そこまで判断するとは珍しい少年だ。

「エルはへいたいさんが大好きなのよ」

どうやらタニアが近衛師団まで遙々やって来たのには、ここに原因があるらしい。

エルは飛び上がって駆け出し、それから慌てて戻ってタニアを玄関に押し込んだ。

「お前はもう家でじっとしてろ！ すいませんありますがどうごさいます二人とも帰らないで！」

言うが早い、今度こそだつと駆け出し、あつという間に路地の角に消えた。

「慌ただしいな……」

「早めに済ませたいところですが、彼に事情を確認してからですね」

しばらく待たせてもらう事にして、二人はタニアの後に続いて玄関を潜った。玄関から短い廊下を伝ってすぐが居間になっている。生活感溢れる——というか、親が居ない間に好き放題散らかした様子が一目で見取れた。

待つほどもなく、扉の向こうが騒がしくなる。

「帰ってきたのか、早いな」

一人ではなく、何人か連れ立っているようだ。だが賑やかな声はするものの、一向に入ってくる様子がない。

訝しく思ったレオアリスが扉に近寄り開けた途端、子供達が五、六人、床に雪崩落ちた。

「な、何だっ？」

子供達は床の上からレオアリスをじっと見上げ、それからどつと沸き上がった。

「——王の剣士だ！ こないだ俺御前演習見た！」

「ほら、俺の言った通りだろっ」

「すごい」

「本物だあ！」

「すごい！」

立ち上がって手を叩き合い、瞳を興奮にきらきらと輝かせる。レオアリスが呆気にとられていると、一番前にいた一人がそおっと手を伸ばし、つんとレオアリスの手をつついた。

「……触ったー！ 俺いちばーん」

少年は拳を突き上げた。

「あつずりい！ 学校で自慢する気だろ」



「タニアが連れてきたんだぞ！ 勝手に触るな！」

「俺もつと長く触るー！」

「僕にも触らせてよー」

「ちよつと押すなよ」

身の危険を察知し、レオアリスがじり、と後ろにさがる。が、時既に遅く、少年達は立ち上がり押し合いへし合いしていたと思うと、一斉にレオアリスに群がった。

「ちよつと待て、落ち着けて——ぎやああ！」

一気に押し寄せた重量に負けて、レオアリスは扉の前に倒れこみ、ぎゅうぎゅうに押し潰された。子供達が五、六人、積み重なるようにレオアリスの上に乗っかっている。

「重ーい！」

「ちよつと触れないだろ、どけよつ」

「お前がどけばいいじゃん！」

によつきり伸びた複数の手が、髪やら顔やら肩やら、所構わずぺたぺたと触る。重い上に、くすぐったい事この上ない。

(こ……拷問だつ)

子供達の頭ごしにちらりと金の髪が見える。

「……ロットバルト！ 見てないで何とかしてくれ！」

「ああ——、手が要りますか？」

何だか今思い当たったような、そんな返答にレオアリスは思わずロットバルトの涼しい顔を睨んだ。確かレオアリスの後ろに立っていたはずなのに、いつの間にかちやつかり室内に移動して壁に悠然と寄りかかり、どこか楽しげにすら見える。

「お前なあ」

多分、いや間違ひなく先ほどの意趣返しだ。だが文句を言う前に、のしかかる重量にレオアリスは降参した。

「い——要る要る、潰れて死ぬから！ 内臓出る！」

ロットバルトは手を上げ、鋭く両手を打ち合せた。

「パアン！」と乾いた音が響き、水を打ったようにその場が静まり返る。

「立って整列！ 駆け足！」

魔法のように、子供達はわらわらと立ち上がり、部屋の真ん中に並び始めた。

「僕が前だよ、プティはエルの後ろだろつ」

「僕の前はケイだつては」

「ちよつと早くしろよ！」

「ねえねえ一番前つてさあ、何で腰に手を当てんのー？」

「それは学校だろ、これは右腕だつて」

「え、左だよ」

「右」

まさに蜂の巣をつついたような騒ぎも一瞬で、子供達は見事な隊列を作り上げた後、さつと静まり返った。

解放されたレオアリスが漸く立ち上がったのはその後だ。

「——何今の」

ロットバルトが手を伸ばし、肩や背中に付いた埃を払う。

「軍に興味があるなら、訓練の物真似位するでしょう」

「——ああ……」

レオアリスは疲れた顔でがっくり肩を落とした。

「どうぞ」

「？」

「期待されてますよ」

ロットバルトの示した方を見れば、少年達の瞳がきらきらとレオアリス達に向けられている。

レオアリスが——剣士が何を言うのかと、期待に満ち溢れた瞳だ。

何か、前も同じような事があったな、とふと思ひ出が甦った。気負い過ぎてろくな事が言えなかった。

「……あー、敬礼はそうじゃない。師団は左腕を胸に当てる」

別に大した事を言った訳でもないのだが、少年達はまたわつと騒がしくなった。

「ほらみる俺の言った通りじゃないか」

「右は正規軍だよ」

今度こそ全員左腕を胸に当て、真剣な顔でレオアリスとロットバルトを見上げる。全員真顔の分、レオアリスは吹き出しそうになった。

「もう敬礼はいいぜ。——」

これで訓練はおしまい、とでも言おうかと思ったが、ふと思い付いて口元を引き締める。十歳ばかりの少年が六人、充分な数だ。

「この中で、将来近衛師団に入りたい奴はいるか？」

少年達の瞳が輝く。

「はいっ！」

「入ります！」

「第一大隊に入れてください！」

次々と威勢良く拳がった六本の手の前で、レオアリスは殊更真面目な顔を作って頷いた。

「入隊は厳しいぜ。試験がある」

「試験やりますっ」

「師団に入れるなら、どんな事でもがんばります！」

間髪入れずに返る少年達の情熱にレオアリスはそつと口元を緩め、すぐまたそれを引き締める。

「なら、最初の試験だ。これから作戦の指示を出す」

少年達は思いがけない言葉に顔を見合せ、喜びに沸き上がった。作戦、という響きが、少年達の憧れを大いに掻き立てたようだ。

「やったあ！」

「王の剣士からの作戦だぜ！ 本物だ！」

「すっげえー」

「静かに」

ぴたりと静まり返り、六対の瞳がレオアリスの顔をじつと見つめる。

「簡単な作戦だ。これからすぐここを出て」

期待に満ちた少年達の顔は、次の言葉に瞬く間に凍り付いた。

「お化け屋敷とやらにミーニャを救出に行く」

途端に全員がそれまでの元気を無くし、俯いてしまった。足先をもじもじと動かし、お互いの様子を伺うように、そつと視線を合わせている。

「簡単だろ、エルの妹の為だ」

「でも——」

呆れた素振りです、レオアリスは腕を組んだ。

「師団に入りたいなら、この位できないと駄目だろ」

「でもっ」

意を決してサルカと呼ばれていた少年が顔を上げる。彼がこの中では一番身体が大きく、年長のようだ。

「でも本当に出るんだ」

「すっごい恐いんだよ」

「誰もいないのに明かりが灯ったり、声が聞こえたりするんだ」

サルカや他の少年達は口々にお化け屋敷の恐ろしさを語り始めた。タニアの兄のエルだけは、まだ視線を落とさずじままだ。

「大人だって近寄らないんだから」

薄気味悪そうな声は、彼等が本当に恐がっている様子をはっきり伝えてくる。

「前に金物屋のエディがあの家に入ろうとして、追っかけられて逃げたっ。エディはこの辺りで一番年上だし、強いんだよ」

「でもその後熱だして三日間寝込んだんだ」

「お婆さんがいたって言うんだ。真っ白い髪で、にやあーって笑って、こう」

サルカが両手を広げて追いかける振りをすると、周りの少年達がぎゃ

あつと悲鳴を上げて散らばった。

(面白そうにしか見えねえ……)

少年達は本気で恐がっているのだが、どの話もどこかで聞いたようなものばかりで、レオアリスにはほんの少し物足りない。

ただ、ミーニヤを助ける事は恐いとか物足りないとか、そんなものは別の話だ。

「安心しろよ、別にお前達だけで行けって言ってんじやない。——俺も行く」

「——ほんと？」

さつと顔を上げたのはエルが一番先だった。レオアリスは力強い笑みを口元に浮かべ、エルと、他の少年達の瞳をしっかりと見つめた。

「ああ。俺は常に王をお守りするが、——今日はお前達を守ろう」

それは形もない、だが確実な力を持つ誓約だ。

少年達は自分の目の前にいるのが誰なのか、改めて思い出したのだろう、再び瞳を憧れと喜びに煌めかせた。

王の認めた剣士がいて、しかも自分達を守ってくれる。

恐いものなどあるはずがない。

「できるな？」

「できます！」

「ターニヤもできる——」

少年達の唱和に、幼い声が重なった。見ればタニアが元気いっぱい小さな手を上げている。エルは腰に手を当てて首を振った。

「お前はダメ。家に居ろ」

「ターニヤもミーニヤをたすけるもん」

「だめだったら、危ないだろ。遊びじゃないんだから！」

「いくもん——！」

「駄目だったら駄目——」

「うっ」

ぴしりと言い切られ、タニアはくしゃりと顔を歪ませた。泣く、と思った瞬間にはもう大音量だ。

「行ぐうー！ ミーニヤがまづつてうもん——！」

「泣くなつてば、もう——」

「ミーニヤがおばけやしきでひとりなんだもん——！」

「だから兄ちゃん達が行つてくるつて」

「いやあ——！」

タニアは困り果てたエルの横を抜け、ロットバルトの足にしがみついた。

「おねえしやんターニヤもつれてつて——ミーニヤをたすけるによおっ」

「お、お姉さん？」

間違いに気付きエルの方がぎよつとして慌てて顔を見上げたが、ロット

バルトは特に怒った様子もなく手を伸ばしてタニアの頭を撫でた。

「今回はさすがに駄目ですよ」

「いやあ！ いくつたらいくによお——！」

「タニアがもし怪我でもしたら、エルはとても悲しむでしょう。タニアが

ミーニヤを心配するのと同じだ。それは判りますね」

「ミーニヤ——」

「当然ミーニヤも悲しみますよ」

タニアは長いこと考えてから、こくりと頷いた。

「ミーニヤはお兄さんが助けてくれます。エルもそう言っているでしょう」

タニアが間違うのも無理はない整った顔を向けられて、エルはぱつと顔を赤くしながら首を縦に振った。

「ちゃんと連れて帰ってくるから。兄ちゃんを信じろよ」

手を伸ばしてタニアをぎゆうぎゆう抱き締めると、タニアは一層安心したようだった。妹の涙を拭いてやりながら、エルはこっそり耳打ちした。

「あのさあタニア、言つとくけど、その人兄ちゃんだぞ」

「エル？」

「タニアが指差したのはエルだ。」

「そうじゃなくって——中将だよ、偉いんだ、間違えたら失礼だろ」

「まあまあ、気にすんな、面白いから！」

きっぱり言い放って、レオアリスは笑いながらエルの肩を叩き、ついでにタニアの頭をくしゃくしゃと撫ぜた。

ロットバルトの含みのある視線をやり過ごして、レオアリスは彼等を見渡し、ちよつと真面目な顔をしてみせる。

「さて、行こうか。この潜入及び救出作戦の成功は、お前達の双肩に掛かっている。気を抜くなよ」

「はい！」

近衛師団の隊士達にも負けない、いい返事が返った。

タニアをセルテおばさん——彼女は先ほどの通りで会った女性だ——に預け、改めて、エル、一番年長で十歳のサルカ、惣菜屋のプティ、エルより一つ年下で赤毛のライナス、ライナスと同じ年のケイ、ケイの従弟のテッド、それぞれ六人の少年達は、意気込み高く、時折興奮の余りちよつと騒ぎすぎたりしながら、街外れの廃屋へと行進した。

何度もレオアリスを振り返ってそこに実際にいるのを確認しては、押さえ切れない喜びに隣と手を取って跳ね回る。

「王の剣士は人気ですね」

ロットバルトの苦笑に、レオアリスは少し照れくさそうに首筋を擦った。

「どんな噂が流れてるんだかな。聞くのが怖い」

「口から火ぐらひは吹くかもしれませんよ」

「剣じゃねえのかよ……」

あり得ない話でもない。噂というものは兎角肥大化するものだ。

ロットバルトは口元だけで笑って、それから傍らを歩く上官に視線を落とす。

「子供等は置いてきた方が早かったでしょうに。手間を掛けられるものだ」

「まあな——けど、お化け屋敷とやらが本物だろうとなかろうと、そこにあるんだから恐がってばかりじゃ進まない。本当は俺がここに居なくたって、あいつ等はミーニヤを助けに行かなくちゃいけないんだ。自分の身近な存在の為なら、自分で動かないとな」

サルカとプティが手を振り、レオアリスは片手を上げた。途端に全員が競争するように手を振って、その勢いの良さに笑う。

恐がっていてミーニヤを助けに行かなかつたら、彼等は、特に兄のエルはその事に対する引け目を折に感じていく事になる。それが少し気がかりだったから、レオアリスは彼等を連れて行くことにしたのだ。

「まあ些細だが、俺はきつかけとしてはいいだろ」

一行はどんどん街の外れへと歩いていく。賑やかだった通りは次第に人通りの無い、うら寂れた雰囲気を漂わせ、子供一人で通らせるのは躊躇うような狭い路地になった。

「タニアが一人でよく通ったな」

「ミーニヤがいたからでしょうね。どこでも支障はないでしょうから……」

「こつち！」エルが手を大きく振って、曲がり角を指し示し、二人は足を早めた。

角を曲がった瞬間に、その屋敷はあった。

細い通りの行き止まりに、他の建物に挟まれるようにして、屋敷の門がある。高い扉を刳り貫いたような門で、厚い木の板でできていた。

門は固く閉じられていたが、木の板は下の方がぱっくりと大きく割れ、影を孕んで口を開けている。子供が通るのでやっとな大きさだ。

割れ目から見えるぼうぼうに生い茂った雑草と、蔦の絡まった木。その奥に覗く屋敷の壁も一面緑の蔦に覆われている。

敷地は正面から見たよりも広そうで、屋敷は門の向こうで左右に棟を広げていた。

子供達が恐がるのも頷ける。王都にこんな場所があったとは、思ってもいなかった。

その一角だけ忘れ去られたようにしんと静まり返り、それはまさに、廃墟だ。

「ミーニヤ！」

エルは門の傍に寄って声を張り上げたが、屋敷から返る声は無い。逆に静寂が一層増した気がする。

「まだここにいるのかな……もういないんじゃない」

サルカ達は怖そうに、レオアリスとロットバルトの背中から屋敷を見上げていた。

「恐くなつたか？」

「恐くなんかないよ！ いや、ありません！」

「いいよ、その喋り方は止めとけ。いつもそんなふうには喋らねえんだろ。その内舌噛むぞ」

「でもー」

「慣れない事に気を遣っていると怪我もしやすい」

エルやサルカは残念なような、ほっとしたような表情で顔を見合せ、頷いた。

「それじゃ中に入ろう——乗り越えるか、下を潜るか」

「我々には無理ですね。乗り越えましょう」

門の高さは一間ほど——六尺あるロットバルトよりも、まだ身体半分ほど高い。まるで来訪者を拒絶しているようだ。

「先に」

そう告げるとロットバルトは腰に佩びていた剣を抜き、地面に立てた剣を足場代わりにして、苦もなく塀の上に飛び乗った。

「忘れ物」

レオアリスが投げた剣を受け取り、塀の向こうに降り立つ。

ほどなく門を引き抜く音がして、厚い木の扉が身を軋ませながらゆっくり内側から開いた。

いよいよ屋敷に入るのだ、と、少年達はびっくりと首を縮める。だが彼等より前に立つレオアリスの背中を見つめている、その瞳には不安は無い。

扉が開き切ると、レオアリスは一步雑草の中に分け入った。

本来あっただろう玄関に続く小路の先に、蔦の覆った屋敷が建っている。玄関の扉は木の板で打ち付けられていたが、門よりも荒れ果てて漸く蝶番で止まっているといった様相だ。

壁に並ぶ窓も全て割れ、無事なもの一つも無い。

誰も住まなくなってから十年は経っているような、それほどの歳月の経過を感じさせる。

「ここは昔、おじいさんが住んでたんだって。母さんが言ってた」

プティがそーっと、屋敷に聞かれるのを恐れるように、注意深く口を開

いた。

「いつも怖い顔してて、友達もいなくて、すっごく、へん、へん……」

「偏屈？」

「そう、そのへんくつな人だったて」

「最初は奥さんと住んでたんだろ。でもいきなりいなくなったんだって。だからさ、皆はおじいさんが奥さんを殺したんじゃないかって言ってる」

「あ、知ってる！ それ以来変な音とか声とかするようになったって、ばあちゃんが言ってた」

「じゃあ金物屋のエディが見たのって、そのきつと奥さんだ」

レオアリスはロットバルトの瞳を見たが、同じ感想しかその中には見当たらない。

要は全て、伝聞の域を出ない話だ。

「いつから無人になったんだ？」

レオアリスの問いにプティは指を折った。

「えーっと」

「プティが生まれた年だろ」

「じゃあ、八年前」

「八年か」

八年の間にこの立派な屋敷が「お化け屋敷」と化してしまう理由。それは何だろう。

「ねえ、そう言えばさあ」

一番年下のケイは隣にいた従弟のテッドに首をかしげた。

「おじいさんって、どうしていなくなったんだろ。死んじゃったのかな」

「知らないよお」

サルカがちよっと神秘的な顔で、年下の少年達を見回す。

「いたりして……」

「ぎゃあ！」と悲鳴を上げ、少年達は身を寄せ、レオアリスにピタリとくっついた。

「やめろよもうっ」

「サルカのばあーかっ！」

ケイ達の手はもとより、口にした張本人のサルカまで、しっかりとレオアリスの軍服を掴んでいる。苦笑を洩らし、それからレオアリスは館を振り仰いだ。

「——さて、どう捜すかな」

「一度ぐるりと屋敷の周囲を巡って……」

バン！

突然、何かを打ち付けるような音が、屋敷の中で響いた。

「うわあっ」

少年達が驚いて声を上げ、今度こそがっちり、レオアリスに身を寄せた。

「——」

レオアリスは素早く視線を走らせた。音がしたのは二階の左側のどこかだ。

屋敷は既に、薄気味悪い静寂を取り戻している。

「屋敷の中が先か」

頭を軽く撫でて少年達の手を解き、膝の辺りまで生い茂った雑草に分け入って、レオアリスは玄関へと近付いていく。

「気をつけてね」

少年達が固唾を飲んで見守る中、鍵も把手も機能していない扉は、押すと簡単に開いた。

軋んだ音と一緒に背後から差し込んだ陽光が、埃塗れの床の上にレオアリスの影を黒々と落とす。

床は様々な大きさの足跡で一杯だ。小動物の足跡も散っている。

「肝試しに入る奴はいるみたいだな……」

陰影に浮かび上がった玄関広間は三間ほどの広さで、正面に階段があり左右に扉の設けられた、典型的な作り。

「お化け屋敷」など、それなりにもっと禍々しいものかと思っていたが、期待と違い至って普通だ。

レオアリスの剣士としての感覚には、屋敷は何も訴えてこない。身の裡の剣はびくりともそよがない。

ただ少しだけ——、剣士としての感覚とは違うところで、ぴりりと肌を撫でるものがある。

レオアリスは口元に笑みを浮かべて、埃の中に一步踏み込んだ。

「上将」

ロットバルトの声と一緒に、がさがさと草を鳴らしてエル達が走ってくる。

「待って」

「僕らも入る」

「お一人で行かず、一緒に進んでください」

一人でさっさと進んでいくレオアリスに苦笑しながら、ロットバルトは少年達の後から屋敷に入った。

「ああ、悪い」

どうやらレオアリスは興が乗っている。ただの廃墟に見えるこの屋敷に何か、彼の興味を引いているものが、何かあるのだ。

（最終的には俺一人でお守りか）

この年若い上官の性格は良く判っていて、ロットバルトはこの後六人の少年達をどう制御すべきかと考えながら玄関広間を見渡した。階段の前でふと瞳を細める。

床の埃に刻まれた足跡は、どれも左右の扉や置時計、壁の鏡など、あちこちに動き回っているが、階段前の足跡には一つの特徴があった。

階段前から扉へ、一直線に——

「走ってるな」

「え？」

レオアリスが問い返す。

「足跡です」

指差した方向を眺め、レオアリスも気付いたのだろう、漆黒の瞳を煌めかせた。幾つもの足跡が皆、何かから逃げるように扉に向かっていている。

「第一段階かな。どんな趣向だか——」

ぎし、と傷んだ木の床を軋ませて、レオアリスは階段に近付いた。少年達が付いてこようとするとするのを手で制し、階段の上がり口の一番下に立つ。

三段目辺りで、ほとんどの足跡が引き返している。

足を掛けて、一段登った。耳を澄ますが、これといった変化はない。もう一段。

更にもう一段——。きしりと階段が鳴った瞬間。

突然、壁を震わすような大音量が鳴り響いた。例えるなら狼の咆哮——まるで屋敷全体が鳴っているようだ。

少年達が悲鳴を上げる。

同時に、階上に白い霧が発生し、階段を雪崩落ちるようにどっと吹き付けた。

瞬く間にレオアリスの周囲を白い霧が取り囲む。

「上将！」

「兄ちゃん！」

ロットバルトは駆け寄ろうとして少年達が怯えているのに気付き、足を止めた。肩を竦めて階段を見れば、すっかり霧に包まれて、レオアリスの姿は隠されている。

「ど、どうしよう、」

少年達がロットバルトを見上げた時、霧の中から微かに、歌うような響きが聞こえた。レオアリスの声だ。

「まあ——大丈夫でしょう」

（初めて見るな——）

レオアリスのもう一つの得意業だ。

少年達を退がらせた方がいいかと瞳を細める間に、霧は渦を巻き——、

次いで内側から吹き散らされるように四散した。

突風のような風が、遅れてロットバルト達の髪を煽る。

「久々成功——！」

弾んだ声と共に、すっかり姿を表したレオアリスが、何とも嬉しそうな顔で階段の途中から振り返った。

「——法術ですか」

「そう、風の——もと、俺の十八番な」

歌うような響きは風を呼ぶ詠唱で、霧を吹き飛ばしたのはレオアリスの起こした法術の風だ。

「まあ前より落ちたけど」

少年達はぼかんとしているが、法術は剣士として王都に出るまで、レオアリスの生活の基盤だったものだ。

実際、剣士としての剣よりも、法術の詠唱の方が長く身に馴染んでいるときえ言える。

久々に法術を使って、レオアリスは満足気に見えた。

「今の、術？」

「何かすげえ」

「術も使えるなんて、最強じゃん」

階段の途中に立ったままのレオアリスに近付き、ロットバルトは暗い階上を見透かした。

薄暗い廊下には何も見当たらない。

「今のは何だったのか、判りますか」

レオアリスは考え込むように瞳を細めた。ちょうど階段を上がった二階への入り口部分から、霧が噴き出していた。

「うーん……攻撃って言う感じじゃ無かったな。どっちかっていうと、警告に近いか」

「警告ですか」

「驚いて逃げ出す事を狙ったような、そんな感じがする。まあ二度目は無



いだろう。切ったから」

切った、という言葉が何を指すのかロットバルトが問い掛けようとした時には、もうレオアリスは階段を昇り始めていた。階段下の少年達を手招く。

「もうここは大丈夫だ、行こう。さっきの音が気になる。ミーニヤが上に居るかもしれないぜ」

少年達は顔を見合せ、先ほど術を見た興奮そのままに、わっと階段を駆け上がった。

二階に上がると左右に廊下が延びている。両側に部屋があるらしく、窓の無い廊下は昼でも暗い。

「……ミーニヤ」

エルはミーニヤを呼んでみたが、思いがけず響いた声に、慌てて口を押さえた。

何かに聞き咎められたら困ると、そう思わせる暗がりだ。

「どっちに行くかな」

両翼ともに対照的な造りの館の為に、どちらとも決め手が無い。

「物音が聞こえたのは左側のどこかです」

「じゃあ左から行こう」

踏む度にぎしぎしと音を立てる廊下を、歩き出した。

「灯りが要ったな。俺が術で灯してもいいが、あんまやった事ないから加減難しくして——下手したら爆発するけど——やってみるか？」

「迷惑な。要りませんよ」

当然そんなものはありがた迷惑なだけなのだが、レオアリスは少し未練がましく両手を眺めた。

「迷惑ってなあ……」

「そんな確証の無い手段より、光なら簡単に入りますよ。どうせ鎧戸も硝子も無い窓だ」

ロットバルトは手を伸ばし、片側の扉を開くと、途端に眩しい陽差しが

目を眩ませた。

割れた窓から差し込む午後の陽射しは廊下まで届かないものの、扉の近くの薄暗がりの後退させるには充分だ。

「——」

少年達は顔を見合せ、エルとサルカが駆け出した。廊下をとにかく明るくしようと扉を次々と開けていく。

五つある部屋から光が差し込んだ廊下は、今までの不気味な雰囲気など無かったかのように、ただの埃の舞う白茶けた木の空間に変わった。

「——ミーニヤ！」

エルの呼び掛けも先ほどより力強い。サルカやプティ達も、開け放った扉の奥を覗き込みながら次々ミーニヤを捜し始めた。

「ミーニヤ！ 出ておいで」

「ミーニヤ！」

再び物音が聞こえた。

「ミーニヤ？」

エルは足を止め、辺りを見回す。

「いた？」

「しっ」

唇に指をあてると、サルカ達はさっと口を閉ざし、エルの顔を伺った。静かになった廊下で、全員にそれは聞こえた。

音は一定の感覚で聞こえてくる。

ひた、ひた、ひた。

微かな——、だが、誰かがゆっくりと歩き回る音だ。

「……ミーニヤ——？」

「靴音じゃないな」

レオアリスがそっとロットバルトに囁く。  
ひた。

「ミ」

サルカは素早くエルの口を押さえた。

しん、と静寂が落ち、呼吸の音だけが耳に伝わる。

五度目位に呼吸の音を数えたところで、再び足音は動き出した。

ひた、ひた、ひた。

今度は前よりもはつきりしていた。聞こえてくるのは今居る廊下ではな

く、背後のまだ光の差さない暗がりからだ。

ひた。

『』

声が出た。

レオアリスが眉を潜める。

今、確かに声はレオアリスの名を呼んだ。

聞き覚えの無い声。

いや、どこかで聞いたことがある気がする。

ひた、ひた、ひた……。

足音は止まり、再び、名前を呼んだ。

『——レオアリス』

『レオアリス』

暗がりから、声はレオアリスの名を呼んだ。

「――」

何故、と疑問を抱きながらも、懐かしい、奇妙な感覚に引きずられるように、レオアリスは一步踏み出した。その後ろでぼつりと呟いたプティの言葉に、意識を引き戻される。

「今、僕の名前呼ばれた」

「え？」

振り返ったレオアリスの前で、全員が訝しそうにプティを見た。エルが驚いて首を振る。

「違うよ、エルって言ったんだ」

「そうじゃないだろ、サルカって、俺の名前呼んだもん」

「僕も呼ばれた……」

最後に呟いたケイの言葉は、口の中で小さくなって消えてしまった。

その場の全員が自分の名前を呼ばれている――。

冷たい手で首筋を撫でられたような、そんな顔をして少年達は身を縮めた。

(どういう事だ……?)

レオアリスが聞いた声は一つ、それ以外は聞いていない。

「――趣向としては、悪趣味極まりないな」

低い呟きに、レオアリスは隣を見上げた。ロットバルトはいつになく厳しい表情で、前方の薄暗がりを見据えている。その横顔を見ながら、レオアリスはあれ、と首を傾げた。

(もしかしてこいつ、怒ってるか――?)

普段見ないその感情に驚きを感じると共に、奇妙な感覚はますます強くなった。

レオアリスが聞いたものと、ロットバルトが聞いたもの、少年達が聞いたもの。全て違う――

レオアリスは再び視線を薄暗がりに戻した。

(……何が来る?)

彼等の戸惑いを知ってか知らずか、それは確実に、廊下の向こうからレオアリス達へと近付いてくる。

ひた、ひた……。

「兄ちゃん」

少年達は身を寄せ合い、縦るようにレオアリスを見た。

「――大丈夫だ、悪意は感じられない」

それは確かだ。どちらかと言えば――。

「――」

薄暗がりの中にいるものを見透かそうと、レオアリスは廊下の先に意識を集中した。

足音は、もう薄闇との境まで来ている。

ひた。

足の先が、薄暗がりには浮かんだ。

ゆっくりと、人影が形を現わす。

薄白い光の中に現われた人影に、レオアリスは息を飲んだ。

見覚えのある――、いや、たった一度だけ、幻の中で見た――。

白い、雪と光に満ちた光景で。

「……と」

「じいちゃん?!」

「お母さん!」

サルカ、ケイ、少年達の口から、次々に驚きの声上がる。

「タニア?! お前、来るなって」

エルの驚いた声。

(違う、あれは)

レオアリスは暗がりから抜け出した人物を、呼吸を止めたまま見つめた。真っ直ぐ、レオアリスに向けられた漆黒の瞳。軽やかな、だが確かな力に裏打ちされた笑みは。

目の前の存在が微笑み、口を開いた。

『ここに入ってはいけない。帰りなさい』

胸を締め付けるような、懐かしい声だ。

『ここを去るんだ、すぐに——』

「去るって」

不意にロットバルトが踏み出す。

抜き打つ、と思った瞬間には、ロットバルトの手元から白刃が閃いた。

「——待て！」

「！」

レオアリスは咄嗟に白刃と人影の間に飛び込んだ。

視界に迫る白刃と、壁が透ける人影の笑み。

少年達が何が起こったのか理解する間もない、一瞬の出来事だ。

ロットバルトがゆっくり息を吐く。

「——何をやっているんです、貴方は」

低い声には明らかな憤りと安堵、そして動揺が交じっていたが、切っ先はレオアリスに触れる寸前で止まっている。

人影はレオアリスの後ろで、まだ穏やかに笑っていた。

「何をつて……、それはお前だろ。もし」

不意に高い哄笑が弾ける。人影が笑いながら、薄暗がりにも身を引いた。

『帰れ』

笑い声に紛れて、声が聞こえた。それはこれまでとは違う、しゃがれて年老いた男の声だ。

『私の邪魔をするな』

長く尾を引いて、笑い声は薄暗がりの奥に消えた。

ロットバルトが剣を鞘に収める。少年達がほっと息をついた。

「——単なる幻覚、幻聴の類いですよ。もう気配は無い」

「ああ……」

レオアリスの声には残念な響きがあり、ロットバルトには彼が見た姿が何だったのか、想像ができた。

おそらく。

「失礼しました。……俺には少し、不快なものだったので」

ロットバルトは薄暗い廊下を歩き、次々と扉を開けていく。

西側の五つを全て開け放つと、廊下は全体が白い光に染められた。

そこには彼等以外の姿は無い。

「何の仕掛けか、どういう意図か知りませんが、どうやらそれぞれに見えていたものは違ったようだ。そこに何かしらの意味があるのでしょうかね」

「見え方か……」

確かに、人影が姿を現わした時、エルやケイが口にした名前は、レオアリスが見た姿とは全く別のものだ。

「俺、おじいちゃんだった。去年死んじゃったんだ」

サルカが言ったのは、自分の祖父という意味だ。

「……お母さんだったよお……」

ケイが涙声でしゃがみ込む。

「家に帰りなさいって……」

「タニアに見えたんだ、俺……」

ロットバルトは彼等を見渡し、まだ少し普段と違う色を宿した瞳をレオアリスに向けた。

「言葉の内容は同じで、姿が違う。——貴方に見えたのは」

少し躊躇いがちに、レオアリスが口を開く。

「……ジン。多分——、父さんだ」

会う事などあり得ない、レオアリスの父親。

その姿に見えていたから、レオアリスは咄嗟に剣の前に飛び込んだのだ。ロットバルトは息を吐き、それから一度自分の剣を見た。

「ともかく、剣の前に飛び出すなどと無茶な真似は止めて戴きたいものだ。どうせ俺——」ロットバルトは途中で自分の口調に気付いて、口元に苦笑を浮かべた。「私の剣が折れるだけでしようが、さすがに肝が冷える」

「悪かった。ちよつと考えが足りなかった」

どうも二人して、普段の調子が少し崩れている。

「幻覚か——」

もう一度、その姿を捜そうとするように視線を廊下に彷徨わせ、ただすぐに、レオアリスは瞳の色を変えた。

「まあ消えたものは今気にしても仕方ない。まずはミーニヤを探そう。この謎を解くのはその後だ」

そう言うってから、まだ涙を零してすすり上げていているケイの前にしゃがむ。多分ケイは、母親を亡くしているのだ。

七歳は、母親の姿で帰りなさいと言われて、その言葉を無かった事にしてきる年齢ではないだろう。

ケイの背中をさすり、レオアリスは少年達を見渡した。

「この先は俺達に任せて、お前等はもう帰っていいぜ。疲れただろう」

従兄のテッドはケイの頭を撫でながら、青ざめた頬で強気な顔を見せる。

「大丈夫、まだ頑張れるよ。だって任務だもん」

「任務の場合は特に、上官が部下の体調管理までをする。引かせる判断も俺の責任の内だ。お前には、作戦行動の仲間として、ケイを安全に連れ帰ってもらいたい」

テッド位の年齢にはまだ少し難しい言葉だったが、レオアリスの真意は伝わったのだろう、頬を引き締めて、こくりと頷いた。

レオアリスは笑みを返し、立ち上がる。

「ロットバルト、悪いがこいつらを路地の出口まで送ってくれ。俺は二階の部屋を調べる」

「俺は残る！」

エルはさつとレオアリスに近寄り、頭二つ分も高い所にある顔を見上げた。

「残ってもいいでしょう？ タニアがミーニヤを心配して待ってるんだ、帰れないよ」

「俺も残る。だってさ、本当のじいちゃんなら、最後までやれって言うもん」

サルカもエルの隣に立った。プティも素早く二人に寄って、ぐつと顎を上げた。

「僕も。帰るのはケイとテッドとライナスだ」

名を呼ばれ、ライナスは少しほっとした照れくさそうな笑みを浮かべて、ケイとテッドの隣に立つ。

「僕はその、帰るよ。僕がケイとテッドを送ってく」

「ちゃんと家まで送れよ」

「明日学校で武勇伝聞かせてやるから」

「寄り道しないようにね」

ちようど三人ずつになって、少年達はお互いに手を振っている。

「どうやらもう決定したようですね」

レオアリスがいいと言う前に、三人はすっかり残る方向で決まったようだ。

「らしいな。まあいいか。どうせもうあと少しの事だ」

一応ロットバルトに三人を路地の出口まで送らせ、レオアリスはエル、サルカ、プティと一緒にまずは二階の部屋を見て回る事にした。

先ほど光を取り込む為に扉を開け放った部屋が西側に十、東側にはまだ閉ざされたままの九つの部屋がある。

「三人一組で見て回れ。廊下から覗く位でいい。何かあったら俺を呼べよ」

「はい！」

三人は頷いて、我先に廊下を駆け出した。

「開いてるとこの、一番奥から見よう！」

「開けてないとは？」

「――後」

威勢良く、ただ部屋を覗き込む時にはちよつと恐々とした姿を可笑しうに見守りながら、レオアリスにはもう、二階に何の気配も無い事は判っていた。

東側の扉を幾つか開けてみたが、やはりあるのは埃と蜘蛛の巣を被った古い家具だけだ。どこも寝台と文机、長椅子が一揃え揃えられている様子から、この階にあるのはほとんど来客の為の客間のようなだった。

「うーん……これだけか」

適当な部屋に入り、硝子の無い窓から外を見渡して、レオアリスは唸った。部屋から見える庭も、手を入れる者もなく荒れ果てている。

階段での霧は恐らく、侵入者を追い返す為のもの。先ほどの声、『帰れ』と告げたあの声も、警告の一つだ。

ただそうして警告を発する原因らしきものが、ここには全く見当たらない。

「何をそんなに大事に守ってるんだ？」

あんな手の込んだ仕掛けを作り、廃墟になった屋敷を守っている理由はどこにあるのだろうか。

それにもう一つ、あるだろうと思っていたものが見当たらない。

「三階かな」

「上将」

ケイ達を送って戻ってきたロットバルトが、レオアリスのいた東側の部屋を覗き込む。廊下に立ったままなのは、まだエル達がいるからだろう。

「路地まで送りましたよ。後は慣れた街だ、問題ないでしょう」

「悪いな」

「それと、廊下の両端に階段室があります。三階へ行くにはそのどちらかですね」

「何か判ったか？」

レオアリスは窓を離れて廊下へと出て、左右の廊下の奥を確認した。東側の両端に少し他の扉より間隔が狭い扉がある。ロットバルトは肩に付いた埃を払い、その肩を軽く竦めた。

「埃ばかりですよ。どちらも暫く使われた形跡はありません」

「うーん」

もう一度、レオアリスは唸って口元に手を当てた。

「じゃあミーニヤがいるとしたら、一階か、外か――」

「もう抜け出している可能性もありますね」

「てことは、別の場所を捜すべきかな。広範囲になるとやり方変えなきゃいけないか」

ミーニヤがもうこの屋敷を出て行ったとなると、人数を出して、目撃情報から場所を絞っていかなくてはいけない。

時間がかかる。レオアリスは窓の外を見た。そろそろ午後も二刻を過ぎ、あと一刻もすればこの季節の太陽は淡く傾いてくる。

「まあ、一応全て確認した方がいいでしょう」

「うん。心配なのは食糧と水だな。昨日から何も食ってないだろう」

「適当に過ごしますよ」

「お前、二歳児だぜ？」

どういふ訳か少し複雑な顔をして、ロットバルトは一度口を噤んだ。

「上将」

「兄ちゃん！」

ぱたぱたと足音がし、西側の部屋を捜していたエル達三人が廊下を走ってくる。

「お前等、あんまり走ったら床を踏み抜くぞ」

元気の良さに笑ってレオアリスが注意を促すと、三人は途端に抜き足差し足になってレオアリスの元に辿り着いた。緊張と興奮に高潮させた頬を向ける。

「こっちは何にも無いよ。全部見た」

「全部の部屋？」

尋ねると、三人は力強く頷いた。

「変な部屋は無かったか？」

奇妙な質問に、少年達が顔を見合わせる。

「変な部屋？」

「そう。本とか、そうだな、訳の分からない道具が一杯の」

ふと、レオアリスは口を噤んだ。微かな声が聞こえたような気がしたからだ。

口元に指を当てて合図し、それからレオアリスは彼等から少し離れて耳を澄ませた。

声は確かに、途切れ途切れながら、しんと静まり返った屋敷の中に聞こえてくる。一人ではなく、二人——、おそらく会話している。

辛うじて聞こえてくる声を辿り、レオアリスは天井を見上げた。

「三階か」

エル達はレオアリスの判断を待つように、じっと彼の顔を見つめている。

レオアリスは白茶けた廊下と先ほど上がってきた大階段を見つめてから、頷いた。

「行ってみよう。多分これで、最後のからくりだ」

階段室はロットバルトが見た通り、それぞれ廊下の両端の扉の奥にあった。近い方、北側の階段室の扉を開ける。

三階だけでなく一階へも下れるように階段が続いている。家人が普段使っていたのは玄関広間の大階段ではなく、こちらの階段なのだろう。造りからして三階には、家人が使っていた部屋があるはずだ。

灯りは無く、壁に取り付けられた小さな窓から、陰った陽の光がぼんやりと折れ曲がった階段を浮かび上がらせている。

話し声は階段を上がるにつれて次第に大きくなってきた。

「またお化け……?」

「いや」

それは予想に反して、楽しそうな笑い声だ。

柔らかな女性の声と、それに答えるのは男の声。

話している内容までは聞き取れないが、一瞬廃屋にいるのを忘れさせる響きだった。

階段を上がりきって廊下への扉を開けると、視界に映ったのは二階とさほど変わらない、暗い古びた廊下だけだ。

まだ話し声は続いている。

「真っ暗——どうしよう、また扉全部開ける?」

プティが扉から首を出して、レオアリスの顔を眺める。

「一つだけ開けよう。声は多分、真ん中辺りの部屋だ」

歩き出そうと床を踏んだ途端、予想以上に音を立てて、床が軋んだ。ギシ、という音が廊下に響き、思わず足を戻そうとした時、どこかでガタン!と音が響いた。

何かが倒れるような音だ。

「うわあっ!」

エル達が階段室に駆け戻る。

「しっ」

レオアリスは再び耳を澄ませた。まるで音に驚いたように、話し声はびたりと止まっている。

「何だろう、今の音」

「ミーニヤだ!」

「あ、エル!」

止める間もなく、エルは暗い廊下を走り、目に付いた扉を次々と開放けた。

「ミーニヤ!」

三つ目の扉を開けて、エルは驚いたように立ち止まった。

「どうした?」

追いついたレオアリス達も、室内を見渡して、瞳を丸くする。

「わあ……」

少年達が感嘆の声を上げたのも無理はない。

その部屋は、これまでの廊下や室内が嘘だったかのように、荒れた様子一つ無く整然としていた。

まるで今もまだ、誰かがここに住んでいるように見える。

窓には全て硝子が嵌り、曇り無く陽光を呼び込んでいる。

花の絵を散らした壁紙、天井から下がる、幾つもの灯りを灯す吊り燭台。

飾り棚の上には、硝子の小瓶に入った香水や化粧品が置かれ、その隣に大きな姿見は覆い布が除けられて室内を半分映し出している。

微かに漂う香の香りは、品良く大気を染めて漂う金木犀。

それらは、先ほど聞こえた声のような、穏やかで優しいような、少し年齢の高い婦人を想像させた。

特に目を引いたのは、壁際の滑らかな流線を帯びた白木の卓だ。卓を挟むように置かれた二つの椅子の、その一つが床に倒れていた。

「さっきの音はこれか」

レオアリスは室内に入ると、どこか遠慮がちに倒れている椅子に近付い



た。何となく、今現在、誰かが使っている部屋に無断で入る気がしたからだ。

膝を付き椅子の背を持って起こしながら、何の気なしに卓の下に目をやって——、視界に映ったものに、さすがのレオアリスも思わずぎよっと息を飲んだ。

足だ。たった今まで誰もいなかったはずの正面の椅子に、誰かが座っている。

「兄ちゃん！ 前、前っ！」

「お化けだっ！」

「っ——」

声もなく立ち上がり、呼吸を落ち着けながら、レオアリスはまじまじと卓を挟んで座る相手を見つめた。

既に六十は過ぎた男だった。不健康にこけた頬に落ち窪んだ瞳。気難しそうな印象だ。ただその瞳の中には深い知性と、悲しげな色がたゆたっている。

対峙するように立ち尽くしたレオアリスの視線の先で、男の姿は一度揺れ、その向こうに壁の模様が出て見えた。

「——驚いた……」

レオアリスが息を吐く。

実体ではない。だがそれは、傾いてきた陽射しを受けて、不思議と違和感無くそこに座っていた。

男はゆっくりと顔を上げ、室内を見渡した。だがその瞳はレオアリス達を捉えている訳ではない。

静かに、独り語りのように、男は語り出した。

『また煩い親族達が来た。私が独りになって以来、ここを引き払えと毎回同じ言葉だ。引き払う気は全く無い。ここは妻と過ごした、大切な場所だ。妻の記憶が木の板一枚一枚に刻み込まれている』

声は淡々としながら、聞く者の心を揺さぶる哀切な響きに満ちていた。

時折過ぎるのは、憤りと、それに勝る悲しみだ。

『妻だけが、ずっと私の傍にいてくれた。どんなに研究に没頭しても、彼女はずっと私の隣で微笑んでいてくれた』

(記憶——)

それは過去の記憶を、今ここに再現しているように見えた。

懐かしむ瞳が、レオアリスを通り越す。視線を追って振り返った先に、扉があった。

今入ってきた扉ではない。続き部屋への、おそらく寝室への扉だろう。

ロットバルトがその扉を開けるかどうか、無言で問い掛ける。

レオアリスは僅かに思い悩んで、首を振った。

おそらくその扉が、この屋敷の守っているものなのだ。

『私をしている事はおそらく愚かな行為だろう。失ってからこうして思い出す妻の姿がどれほど真実なのか、私にも判らない』

自分を嘲うような男の瞳に宿っているのは、それを裏切る切望の色だ。『それでも構わない——。せめて彼女の許に行くあと僅かな間は、私は彼女の微笑みに答え続けよう』

男は立ち上がり、レオアリスの傍を——正確にはレオアリスの上を通り抜け、扉に向かった。その動きに引き寄せられるように、レオアリスも扉に近づく。

男を迎え入れるように、扉は音も無く内側に開いていく。

扉から、猫足をした天蓋付きの寝台が見える。深い緑色の毛足の長い絨毯が部屋全体に敷かれている。寝台の柱にゆるやかにたわめて纏められた絨毯と同じ色の天鵞絨の布。寝台をぐるりと覆うのは、白く透ける薄い布だ。

男は厳かたさえ言える動作で寝室へと入っていく。

男の後を追ってレオアリスが扉の木枠に手をかけた時、寝台を覆う薄い布がふわりと揺れた。

風はない。

だが見ている者の瞳を幻惑するように、重なって流れる薄い布は、それ自体に意思があるかの如くひらり、ひらりと揺れ——、やがてその奥に、人影を映した。

「——」  
寝台の上に座る人影。揺れる布の切れ間から、寝台に腰掛けた足が見える。

男に気付いて、ゆつくりと、その人は振り返った。  
向けられる、穏やかな笑み——

「——」  
『——レオアリス』

やわらかな女性の声に、もう一つの声が重なる。

「今日はとても良い天気ね」

『良い天気だな。積もった雪も溶けそうだ』

声は次第に女の声と逆転し、明確に耳に響いてきた。

女の姿に重なって、一人の青年が立ち上がる。

漆黒の髪と瞳。飄然とした、だが自信に満ちた笑み、引き締まった面差しは、レオアリスにとても良く似ている——。

息を呑んだまま見つめるレオアリスの前で、青年は眩しそうに窓の外を眺め、またその瞳をレオアリスに向けた。

『たまには外に出て、一緒に庭を散歩しませんか。あなたはいつも部屋に籠って研究ばかりだもの』

「こんな日は外に出て、黒森でも散歩するのが楽しい。カイル達は部屋に籠って薬草取り位しか森に行かないが、ただ森を歩くのもいいもんだぜ」

（——さん）

呼ぼうとしたが、舌は自分の意思を失ったかのように、声にはならなかった。

青年はゆつくり、寝台の傍を離れた。窓を開いて風を入れると、深緑の絨毯を踏んで、レオアリスの立つ扉へと二、三步歩み寄った。

「あんまりぶらつき過ぎると、母さんが怒るけどな」  
悪戯っぽく、互いの間だけの合図を送るように、青年はレオアリスに向かって口の端を上げて見せた。

父親と息子の間だけに成立する、秘密の会話だ。

「お前も行くだろ？」

青年はレオアリスの瞳をしっかりと捉え、返答を待つように首を傾けた。  
堰を切り、声が溢れる。

「父さん！」

その瞬間、青年の姿は陽炎のように揺らぎ、元の初老の女性の姿が現れた。

『——』  
「——」

二つの声も、最後は聞こえなかった。光に溶けるように、青年の姿が消える。

「——父さん！ 待ってくれ」

青年の姿を探して寝室に飛び込み、慌てて辺りを見回すレオアリスへ、女は柔らかく微笑んで、すぐにその姿も見えなくなった。

呆然としたまま、レオアリスは暫くその場に立ち尽くした。

青年の姿も、女の姿も、男の姿も、影一つ無い。

ただ開け放たれた窓から風が吹いて、寝台を覆う布が揺れる。

「——」  
漸く我に返り、レオアリスは寝台に近寄ると、覆っている薄い布をから

げた。

予想していた通り、そこには誰の姿もない。綺麗に整えられているものの、使われた形跡も見当たらなかった。

ぐっと唇を引き結び、レオアリスは居間への扉へ向かった。

これがおそらく、この屋敷の最大の仕掛けだ。

戸口に立っていたロットバルトが左の壁を示し、そこにあるものに足を

止める。

寝台の横の壁に、一枚の絵が掛かっていた。

描かれているのは、白髪を上品にまとめた、穏やかそうな初老の婦人。たった今日の前で微笑んでいた人物だ。

「守ってるのは、この人か——」

視線を向けた先で、ロットバルトもまたその肖像画を見上げている。その表情にも、レオアリスと同じ、驚きと、夢から覚めたような色がある。それからもっと別の、瞳を更に蒼く染める感情。

「——何か見えたか？」

レオアリスが尋ねたのは、今自分が見たものが本物かどうか確認したかったからだ。すぐにそれに意味が無い事に気が付いた。

この場所で見えるものはそれぞれ違う。

多分彼は彼自身の、別の姿を見たのだろうと、そう思った。

「さて……。見えたものが本物か、それとも望みの投影か——」

そこに先ほどの凍るような怒りは見えず、普段より自然な、穏やかな表情が浮かんでいる。

何を見たのか尋ねようかとも思ったが、それも止めた。

「——最後は聞こえなかったけど——何となく、名前を呼ばれた気がする」

「……そうですね」

ロットバルトも同意を示すように笑みを刷いた。

これで全てが終わったような、そんなしんみりとした空気を破り——。

唐突に、にゃあ、と間延びした鳴き声が聞こえた。

「ん？」

レオアリスは振り返り、声がした辺り——居間の、窓に向けて置かれている長椅子を覗き込んだ。

声の主は、弾力のありそうな天鵝絨張りの長椅子の上に、でん、と座っていた。

猫だ。

艶やかな焦げ茶色の縞模様、両の前足の先だけが白い。ひよいと振った尻尾は短く、先端が鉤のように曲っている。ちよつと横幅が広く眼光鋭い、いわゆるふてぶてしい容貌の猫だ。

猫は満ち足りた様子で、長椅子の上で大きく欠伸した。

「こんな所に猫か、ここの飼い猫だったのかな……」

レオアリスが手を伸ばそうとした時、エルが猫を見てぱつと顔を輝かせた。

「ミーニャ！」

走り寄り、両手で重そうに猫を抱き上げる。

「ミーニャ……？」

一言呟いてから、レオアリスは唾然として固まった。

「——ええ！——猫お！？」

猫は満足げに、エルの腕の中に納まった。と言うより、動くのが億劫で、飼い主に運ばせようという腹積もりのようだ。

「ちよつと待てエル、ミーニャってそれか？！」

「そうだよ！ ありがとう、見つけてくれて」

エルが嬉しそうに頷くのを見ても、まだレオアリスは唾然としたままだ。サルカとプティが駆け寄ってエルの肩を叩きながら喜び合っている中、

ロットバルトの低く、微妙な含みを持った声が耳を打つ。

「だから言ったでしょう、周囲の大人が取り合わないのはおかしいと」

「いや、だってタニアは妹って言ったじゃねえか」

「少し考えればすぐ予測できますよ。三歳の子供が猫を妹扱いしてもそれほど不自然ではないし、いかにも猫に付けそうな名前だ」

「——お前、そこまで判ってたんなら言えよ……」

本気でタニアの妹だと思っていた自分はかなり情けなく思えて、レオアリスはがっかりと肩を落とした。対してロットバルトは悠然としたものだ。「どうせ猫だろうが人間だろうが、タニアの頼みに手を貸すと言うのには変わり無いでしょう」

「多分そうだろう。」

「どちらでも、貴方は断れませんからね」

「それに書類は山と積まれていて、丁度良く副将もない。しかも『お化け屋敷』などという胡乱なものも、貴方の興味を引くには十分だ。結果は変わらない」

全て反論は無い。ただ、何となく釈然としないのは何故だろう。

だが取り敢えず自分の中で折り合いを付けて、レオアリスは顔を上げた。

「——まあ、これでタニアが喜ぶからいいか」

エルやサルカ、プティの三人も、目的を達成した喜びで、とてもいい表情をしている。

「さてと——」

ミーニャは無事——誰が何と言おうと無事見付かった。

ただ後もう一つだけ、やる事があるのを忘れてはいない。

「謎解きをするか」

レオアリスはその後、三階の扉をひとしきり開けていき、ある部屋を開けて満足そうに笑みを浮かべた。

「ここか」

「何が？」

その様子を不思議そうに見つめていた少年達を手招く。

「ここが、からくりの中心になった部屋だ」

そう言ってレオアリスが示したのは、先程の部屋の正面に向かい合うようにある部屋の、更に奥にある小部屋だ。

壁には書棚が作り付けられ、一面に書物や巻物が並べられている。書棚の無い壁には乾燥させた草や木の根が吊され、中央と奥の壁際に置かれた机には小瓶や壺、木箱が所狭しと置かれている。

絨毯を敷いた床の上にも、書棚に納まり切らなかった書物があちこちと積まれていた。

「見たような部屋ですね」

どこか苦笑混じりのロットバルトの言葉に、レオアリスも笑った。

「お前は二回ばかり見てるよな。もっと雑然としてるヤツ」

「何なの、これ」

エルとサルカ、プティはこの部屋の意味がさっぱり判らずに、部屋の中とレオアリス達の顔を見比べている。

「こいつは法術の書物や道具だ。この館の主人は、術士なんだろう」

「へええ！ 術士だって」

「すげー」

少年達の素直な関心に顔を綻ばせながら、レオアリスは中央の机に近寄って埃を被った書物の一部をどけた。そこに現われたものを見て、にこりと笑う。

「あつたぜ。見てみな、これがこの屋敷のお化けの正体だ」

お化けと聞いて、エル達はおそるおそる、机の上を覗き込んだ。

机には大分変色しているものの、三尺四方の白い布が敷かれている。

その上に、幾つもの文字や模様、記号が描かれていた。文字と言っても、エル達が普段学校で学んでいる、通常使われているものとは全然違う。

「これがお化け……？」

「何て書いてあるの？」

全く読めない文字はエルやサルカにはただの落書きされた布にしか見えなく、喉に何かつかえたような顔をして首を傾げている。

レオアリスは一つ一つ、上に載っているものを丁寧にどけ、それに伴い模様は円形の姿を顕にした。

「まあ、こいつがああ霧やさっきの人影を作り出してたって言うべきかな」

「どういう事？」

「これは法術の陣だ。俺も見た事無いヤツだけど、書かれてる文字は大気系だから何となく読める」

そう言って、レオアリスは真剣な瞳で法陣を子細に調べ始めた。

「すげえ高度だな。これ敷いた奴はかなりな高位だぜ。うわ、こんなところに水を組み込むって有りなのか？ ……こっちは風だな……えーっと、こいつは」

他の四人の存在を忘れてしまったように、すっかり独り言だ。卓に手を付き法陣に屈み込むようにして顔を近付け、すごいとかへえー、とか感心しきっている。

このままここに張りついてしまいそうなレオアリスを、ロットバルトは軽く肩を引いて振り向かせた。

「それで、どういう法術なんです。説明して戴かないと日が暮れる」

「ああ、悪い。――」

レオアリスはもう一度法陣を見て、ロットバルト達に顔を戻した。

「これは、そうだな……。幻術なんだが、かなり精巧な造りだ。大気中に術を溶け込ませて、布陣の中に入った相手を取り込む――ように書いてあ

る。布陣の中にいる奴の視覚とか聴覚に働きかける」

「布陣の中？　しかしこの大きさの陣では大人二人が限度でしょう」

「これは一部だ。全体は多分、この館を覆うくらいでかい。蔦で隠してるな」

館の外壁をびっしり覆い隠していた蔦の、その下の壁面に陣を書き込み、館全体を陣の中に囲い込む。

そして、中に入った相手の意識から特定の記憶を引き出し、あたかもそこに実際にいるかのように投影する。

読み取った法陣の内容はそんなからくりだ。

色褪せた布の上の法陣は、見ているだけでは何の力も感じられない。

「さつき切れたのはほんの一部だけか。そうできてるんだな……」

「切る？　先ほどもそう仰っていましたが」

「法陣つてのは閉じて初めて成立する。だから終わらせたり破ったりするには、陣のどこかを切らなくちゃならない。簡単なものなら一度切って終わるんだけど、これはすごい」

レオアリスの顔には術士への、尊敬と憧れにも近い色が昇っている。

「一つの現象を切っても、この法陣はそれに対応した一ヶ所しか切れないようになってるんだ。例えば俺が最初に切った階段はこの部分。途切れてるだろ」

レオアリスは外側を巡る円の傍を指差したが、素人目には果たしてそれが途切れているのかいないのかも判らない。

「全体への影響はほとんど無い。他の術は生き続ける」

瞳を輝かせているレオアリスとは反対に、ロットバルトは面倒そうな色を隠さず、机の上の法陣に視線を落とす。

「では、このまま術が終わらないと？」

「いや、本体が見えた以上は俺でも切れる」

そう言ったものの、レオアリスはふと、微妙な色彩を瞳に宿らせた。

「――」

実際、この法陣によって物理的な害がある訳ではない。それにここは誰も住んでいないとはいえ、個人の邸宅だ。本来はレオアリス達もそうであるべきように、所有者の許可なく立ち入る事は違法行為になる。

そして屋敷を守るのは、所有者として正統な行為だ。

それを勝手に切る事は、自分がしていい事かどうか――

「上将？」

「ああ、うん……」

その事を口にするのと、ロットバルトはあっさり同意した。

「確かに、この屋敷内の物いずれにしても、持ち出したり手を加える為には所有者の許可、もしくは地政院での正規の手続きを踏む必要があるでしょう。まあ貴方の場合は、王の下命があればそれで一切が足りませんが」

そうした建前上の理論を言いながら、ロットバルトにもレオアリスの一番根底にある思いは読み取れた。

老術士が失った最愛の伴侶を、彼女の許への旅路に着くその時まで折に触れては想い出し、語り掛けていただろう、彼の心の中の姿。

彼の施した術は、その中に入った者の心の中にある姿も、再び目の前に投影させた。

レオアリス達が見たのは、自分の心に深く刻まれている、大切な者の姿――もう一度会いたいと願う者の姿だ。

「王の下命も無く、王の剣士である貴方が強権を振るったと取られかねない行為は賛同しかねますね。実害が無い内は、我々にはこれを破棄する権利はありません。例え実害があっても、この状況はある意味自業自得です」

普段通り、理詰めで諭すような物言いにロットバルトの意図が汲み取れる。

「じゃあ、ほっといてもいいな」

載りやすいその言葉に載らせてもらおう事にして、レオアリスは法陣の描かれた布を元通りに戻した。

いずれ布が綻びるにつれ、法陣も意味を為さなくなる。

それまでこの場所で、あの老夫婦がゆったりと時を過ごすのもいいだろう。

「あれ、でもそうすると」

ふとレオアリスは、ひとつ辻褃の合わない事に気が付いた。

「どうかしましたか？」

「いや、この幻術は意識の中から投影するから、自分の意識にあるもの以外は見えなはずなんだよなあ。あの女性は術の大元だからいいとしても」

男の姿は。

「——ホンモノかな」

ロットバルトと顔を見合わせ、ただ彼等はそれを恐ろしいとか不気味だとか思うような繊細な神経は持ち合わせていなかった為に、あっさりやり過ぎされた。

「まあいいか」

みやあ、と一声鳴いて、ミーニヤはエルの腕から抜け出した。短い尻尾を振りながら、床に積まれた本の山を抜けて戸口へと向かう。

「もう駄目だよミーニヤ。タニアが心配してる」

エルの言葉を理解したのか、ミーニヤは尻尾を一つ振り、戸口の前で足を止めた。振り返ったミーニヤの眼は、早く帰ろうと誘うように見える。

帰ったらタニアからたっぷりと、ご馳走を貰えるに違いない。何しろちよつと腹周りがぶくぶくしている。

そろそろ陽射しも弱くなってきて、子供達は家に帰る頃合いだ。タニアが待ちくたたびれて、また冒険に繰り出さない内に、ミーニヤを送り届けなくては。

(書類もあるしな)

丸々残っている書類の山を考えると憂鬱だが、思いがけず楽しい午後を過ごす事ができた。

(父さんにも会えたり——)

自分の意識から引き出された幻だとしても、夢でだってあれほどはつきりと、その姿を見る事はできないのだ。

驚かされたのだが、老術士に感謝したい気持ちだ。

「さて、帰るか。皆良く頑張ったな」

サルカが瞳を輝かせた。廊下へと出るレオアリスに纏いつくように、彼の顔を見上げる。

「じゃあ、俺達合格？ 近衛師団に入れる？」

「第一段階は合格だ。充分勇敢だったからな」

「今すぐじゃないの？」

残念そうな顔を見て、レオアリスが苦笑する。

「まだ少し早いな。あと数年して、本気で近衛師団に入ろうと思ったら、もう一つ試験を受けるよ。お前等が第一段階を終了したのは、ちゃんと覚えてやるから」

「本当？」

「約束？」

「約束だ。そうだな——」

纏いつく三人をやりわり解いて、レオアリスは彼等から少し離れた。

近付こうとした三人を、ロットバルトが止める。

傾きかけた陽射しの中、それを染めるような青白い光が古びた廊下と、少年達の頬に差し掛かる。

息を飲んで、少年達はレオアリスの姿を眺めた。

「この剣にかけて」